

TENOHASI

てのはし

地球と隣のはっぴい空間・池袋

会報誌第30号 2015年2月1日発行



新しい宿泊施設「ときわハウス」の共有リビング

巻頭報告 新しい宿泊施設！	2	ボトムからボトムレスへ	14
ドングリおじさんは規格外	4	新聞記事より	16
田屋じい故郷に帰る	9	ご寄付ありがとうございます	18
てのはしのひと ①	12		

巻頭報告

念願の、個室の宿泊施設を持つことが出来ました！

TENOHASIをご支援くださっているみなさま。いつもご支援ありがとうございます。

30号は12月中に出す予定でしたが、事務局長・スタッフとも多忙で疲労困憊し、とうとう2月にずれ込んでしまいました。お詫びします。

今回の巻頭言では、TENOHASIの新たな動きについて報告します。

昨年十月から、新しい宿泊施設「ときわハウス」を池袋西口に開設することが出来ました！

それまでのTENOHASIの宿泊施設「ボトムアップシェアター(略称:ボトム)」は約6年間、炊き出しの公園近くにあるワンルームマンションを借り

て運営してきました。泊まれるのは最大5人。炊き出しや夜回りで出会った「今夜泊まる」ところがない。路上生活から脱したい」という方をお泊めして、多くの方を路上脱出につなげることが出来ました。

最初の頃は、路上生活の方をボトムにご案内すると「雨露しのげてゆっくり眠れるだけでもありがたい」と感謝される方がほとんどでした。

しかし徐々に「雑魚寝は無理。ここには泊まれない」という方が増えてきました。

それはちょうど、私たちの支援対象者の中心が「元ガテン系の日雇い労働者」から「路上生活状態にある障がい者」にかわっていったのと軌を一にします。

飯場を転々としながら働いてきたガテン系の方は大部屋でも他の利用者とコミュニケーションをとってうまく生活する術を持っていて多いのですが、精神障がい・発達障がいを抱え

た方は、まさしくそのコミュニケーションの難しさから路上生活になってしまった方が多く、雑魚寝のストレスは路上に戻るに十分な動機になるのです。

また、「元ガテン系」の中でも、特にアルコール依存症の方が増えたことも問題となりました。シェアターから生活保護につながってアルコール依存症の施設に行っても、断酒と人間関係のストレスから施設を後にして、またボトムに舞い戻ってくるといことが増えてきたのです。

ボトム内は禁酒ですが、外で飲むことを止める手段はありません。その結果、皮肉にも、そうした方たちに生きづらさをもたらしている原因である飲酒習慣を維持するための支援施設となつてしまい、さらに彼らが

集団生活をコントロールすることですますます精神障がい・発達障がい系の方が居づらくなるとい結果にもつながりました。特に夜間は常駐する職員も居な

いことから、様々なトラブルが起きました。雑魚寝のシェアターの使命は終わったことがはっきりしてきました。

昨年夏には、「自立生活サポートセンターもやい」理事の稲葉剛さんを中心とする「つくろい東京ファンド」が、中野区に個室の宿泊施設「あわやハウス」を設立しました。

そしてTENOHASIに相談にいられた方も「あわやハウス」利用させてもらえることになり、実際に何人もの方が利用されました。

しかし実際のところ、池袋の炊き出し・夜回りで出会った方を即日、他団体が運営する中野区の「あわやハウス」にお連れするのは難しく、またその後の相談やフォローも距離がある分だけ密度が薄くなります。「池袋に個室の宿泊施設を持ちたい」というのがスタッフの夢でした。しかし、使わせてもらえる物

件がない（ホームレス、という言葉が出ただけでほとんどの物件からNGを食らいます）、物件があったとしても個室を4〜5つもいっぺんに借りる金がない・・・

悩んでいたときに、連携している団体から「池袋西口にある5部屋のシェアハウスを引き払うから、TENOHASIで使わないか」というお誘いを受けました。家賃は25万。うーん、ボトムより約12万円プラスか・・・その金があればぜひ使いたいけど・・・

と悩んでいたときに、支援活動の先輩である安江鈴子さん率いる「ホームレス資料センター」から「助成金が取れたので、生活に困った人が次のステップに踏み出すための宿泊施設を家賃24万円でやりたい。物件を紹介してくれないか」という依頼が来しました。

あれ、これはひよつとして、組み合わせたらうまく行くのでは・・・

話はとんとん拍子に進み、昨年10月15日、「ホームレス資料センター」が運営主体となり、TENOHASIが支援の実務を担当するあたらしい個室の宿泊施設が出来ました。場所は池袋駅から徒歩一〇分圏内。近くを通っている道路から名前を採って「ときわハウス」と名付けました。

日中は基本的に生活応援スタッフが常駐し、夜間は世話人が泊まって緊急対応に備えます。そのため、5部屋ですが定員は4人。

利用希望者はときわハウスと契約書を交わしていただきまず最初は二週間の利用契約で、その間に聞き取り・相談をして、これからのような生活を指すのか、そのためにどういう資源を活用するかを決め、利用の手続きを行います。二週間で決まらない場合には改めて最長二ヶ月の利用契約を結びます。こうして、最短で数日、最長で数ヶ月の滞在で、生活困窮&ホームレス状態から、じつくりと生活再建へのステップに進むための宿泊施設が出来ました。

雑魚寝から個室になった効果は絶大でした。

昨年の春、炊き出しで「泊まるところがない。疲れ果てた。路上から脱したい」との相談を受けて、ボトムにご案内した方が居ました。しかしその方は、一晩だけで「ここは無理」と言ってそのまま出て行かれました。障がいから来る過敏のため、雑魚寝には耐えられなかったのです。

その方が秋になって再び相談に見えたので、「個室がありませんよ」とお誘いし、「ときわハウス」に入っていたきました。するとどうでしょう、水を得た魚のように元気になり、進んできわハウスの掃除や料理などを引き受けて、「ほとんど世話人だね」という位の活躍を見せてくれました。

「ホーム」を失って苦しんできた方にとって、「安心できる自分だけの場所」というものがどれほど重要であるかを改めて認識しました。

「仕事も家もなくした『ホームレス』が、過敏だからって個室でないとならねないなんて、贅沢じゃないのか」と思われる

方もいらつしやるでしょう。しかし、もう一度言いますが、まさにその「障がいから来る過敏」のために仕事や人間関係につまづき、仕事や家をなくした方も多いのです。泳げない人を海に投げ込んで「頑張れば泳げるはずだ」と説教しても溺死者が一人出来るだけです。

「ときわハウス」の経費は、3月まで「ホームレス資料センター」が受けた助成金で保証されていますが、4月以降はまだ何も決まっています。最悪の場合、4月からすべてTENOHASI負担となる可能性もあります。ぜひ、これからもご支援をよろしくお願いします



イラスト ジェフ・リード

「どんぐりおじさん」は 規格外！



「どんぐりのKさん」といえば、その愛されるキャラでTENOHASI では知らぬ人のない有名人です。

いつもニコニコしながら四つ葉のクローバーなどの「宝物」を探していて、植物の知識は驚異的。クローバーやドングリ、貝殻でお手製のアクセサリをつくって、出会った人みんなに配ってくれます。アクセサリのクオリティは高く、障がい者の美術展で入賞歴も。炊き出しの手伝いに来て、いつの間にか消えて、気がつくとニコニコしながら公園の親子連れにクローバーを探してあげている・・・この人は花の精なのか、はたまた、どんぐりの生まれ変わりかと思うこともしばしば。女性陣に人気の高い「癒やし系」おじさんです。

しかし、この人も元「ホームレス」で、今も再路上化の危機に直面しています。いったい何が問題なのか？

読者の皆様も一緒に考えて頂ければ幸いです。

Kさんをずっと支援してきた生活応援活動の長老・中村夫妻に伺い、さらに密着取材を試みました。

知り合ったのは2008年かな。炊き出しに来て、うろうろしている風変わりな人が居たんですよ。
構ってくれそうな人にはすぐ近寄って行ってドングリにかわいい絵を描いたのを渡していました。
全然人見知りしない。みんな「ドングリの人」って呼んでいましたよ。路上生活だから着ているものは粗末だけど、不思議に清潔感があってね。
年は五十代半ばでしたね。



ある時、その人が病気になるって相談にきました。生活保護を受けて病院へ行きますか、って聞いたら「お願いします」。
ところが、治ったら自分で保護を切ってまた路上生活に戻っちゃうんですよ。そういうことが何回か続きました。お金を稼いでいる形跡もないからどうして生きているのか全くわからなかった。
緊急一時保護センターに入所したときに面接で余りの落ち着きのなさに「この方は就労には不向き」と判断され退所させられ、その後生活保護で山谷のドヤに入りました。その時に、実はKさん障害者年金を受給していることがわかったんですよ。事情を聴くと、彼はご家族とは疎遠になっっていたようですが、親戚に親切な人がいて、その人が彼を身案じて障害者年金の手続きをして定期的に彼の口座にお金を振り込んでくれていたそうです。ですから年金をもらいなから路上生活をしていたようです。
当然、生活保護は打ち切りになりました。しかし、ご本人は

だますつもりなんか全然なくて、年金と生活保護の違いがわかっていなかったんですね。全く悪気のない人ですから。

Kさん若い頃は航空自衛隊にいたそうです。「あんたが空自じゃ飛行機みんなおっこっちゃうんじゃないの？」って聞いたから、「俺は倉庫の係だから大丈夫、それに本当の仕事じゃなくてコピー取りや花壇作りとか雑用ばかりやらされていた」っていつてました。

でも自衛隊入隊中に定時制高校を卒業して、車の免許もとったから、そういう力はあるんですね。

自衛隊を辞めたあとは定職に就けず、車の中や路上で生活しながら日雇いなどの仕事をしていたそうです。

年金の件ですが、その親切な親戚の人が骨を折ってくれて遡及金も入手できたそうです。そのお金でその親戚の人が保証人になって板橋にアパートを借りてくれました。

ところが数ヶ月で部屋がゴミで一杯になってドアが開けられなくなり、路上生活に逆戻り。愛するKさんを放っておくことも出来ないでTENOHASIの応援で豊島区のアパートに引っ越したんですが、ここも2、3ヶ月でゴミで埋まりました。これは大変だつてことで、私が片付けるように説教しました。

でも彼は頑として拒否。「ゴミじゃない。みんな大事なものだ」っていうんです。絶対他人には触らせません。

彼の「大事な物」というのは、ビニール袋に入ったチラシとかで、どう見てもゴミにしか見えません。でもそこまで言うんだから、何か宝物があるんだろうと思って「絶対に手を出さない」という約束をして、袋の中身を見せてもらいました。

袋には大量のチラシ、無料の雑誌（R25など）などが無造作に放り込まれていました。彼はそれを一つずつとりだし、冊子や雑誌のページを全部めくってその中に何かがないか探していました。

すると、10冊に1冊程度の割合で1枚か2枚の押し葉が出てきたんです。

チラシは一枚一枚きちんと折りたたまれていましたが、それを全部広げて裏表を見ると、たまたまチラシの間からどんぐりが出てきました。ポケットティッシュの中からどんぐり。といっても出てくるのは大きな袋から僅かに1つか2つです。

でも、私がどうでもいいようなチラシなどを捨てようとするのと、「ダメダメ」と悲鳴のような大きな声を出して私から取り上げてしまいます。

彼が他の人に「宝物」を触らせない理由が分かりました。彼の宝物は、ごみの中の奥深くに埋蔵されていたドングリや押し葉だったので。

彼は、他の人が自分のように真剣にどんぐりや押し葉を探すわけがないと思っていたようです。たしかに、彼は正しい。押し

し葉もどんぐりも私たちにはどうでもいい物ですから。

私は、部屋に山ほど積まれていた袋の中身全部に彼がこだわっていたように勘違いしていました。そうではなく、彼がこだわっていたのはその中の押し葉やどんぐりだけだったので。その証拠に、仕分け後にでた大量のゴミに彼は何の関心も示さず、処分することを承諾してくれました。彼の本物の宝物全部の体積は、部屋に積まれた「大事な物」の1%にもなりませんでした。

このことが分かったので、私



は彼に、「押し葉やどんぐりを探すから仕分けをやらして欲しい。きつと見つけるからね」とお願いしました。

彼は、最初私を疑っていましたが、私が彼と同じように袋の中のちらしや冊子を一つずつ丁寧に開いて何か出てこないか探しているのを見て徐々に信用してくれました。ポイントは、私自身が彼と同じ気持ちで同じやり方で作業をすることだったのですね。

そこから一気に仕分けのスピードは速くなり、ゴミ屋敷はみるみるうちに片付いていききました。

「彼を大事にする」ということは「彼が大事にしているものを私も同じように大事にする」ことだったのですね。押し葉やどんぐりを宝物として扱えば、彼は心を許してくれることがわかったんです。

私は、支援活動でいままでどうすることも出来ない処遇困難者に多く遭遇してきましたから、Kさんへの対応に関して一筋の光が見えたようで凄く嬉しかったのを覚えていますよ。

とはいえ、Kさんの片づけが苦手なのは彼の障がいの特性で

あり、その壁を完全に乗り越えることはほとんど不可能であることは否定できない厳しい現実です。

ところで、片付けをしている時のKさんの働きぶりはすごかったです。彼の障がいの一つは発達障がい、多分、ADHD（注意欠陥多動性障害）だと思います。

ADHDの特性の一つに「精力的で疲れを知らない」というのがありますが、たしかにすごい馬力でした。

手を機関銃のように動かし、その間、大声でしゃべりっぱなし。

携帯ラジオをイヤホンで聴きながらも家内と会話して二人でガラガラ笑っています。耳の悪い私には二人が何を言って笑っているのか分かりませんが、家内がKさんを最高にいい気分にして、彼のエンジンをフル回転させたようです。

でも、最近は私も体調が悪く、それにいい歳ですからエレベーターのない3階のKさんの部屋に行くのがしんどくなって、支援は若い人たちにお願ひしてい

るんです。

ここに一つ問題があって、発達障がい系の人は秩序や序列をとても重んじるんですね。

Kさんの場合自衛隊にいたこともあって、私のような年長者に命令口調で言われると割と言うことを聞くんです。

でも若い人が優しく言っても言を左右にしてなかなか聞いてくれない。最近はまだアパートが宝物だらけになってベッドにもKさんでなくゴミ袋が寝ていると聞いています。

部屋がゴミ屋敷になって追い出されたらまた路上生活です。本当にヤバイ状況ですね。

ところで、彼は意外にもとてもまめなんです。洗濯は毎日するし、シャワーもこまめに浴びているからいつも小ざっぱりしており、また、部屋の中に山積されたゴミ袋にも不衛生な臭いや不潔感は全くないという不思議な部屋ですよ。

彼の名誉の為に一言言わせてもらえば、彼の部屋はマスコミなどで報道されているいわゆる「ゴミ屋敷」でなく単に荷物が異常に多いだけで倉庫と言う感じですね。しかし、残念ながら、世間の感覚からみればやはりゴ



2015/01/12

ミ屋敷でしょうね。

彼は、部屋ではゴミ屋敷（宝の山）で寝る場所がないので椅子でうたた寝する程度です。

最近主にマックや電車で寝ているようです。アパートがありながら、自分は外で寝て、宝物を自分のベッドに寝かせるなんてKさんの面目躍如たることです。

ところで、とてもかわいい話があつて、彼が毎日朝早く公園に「落ちたて」のどんぐりを拾いに行っていると、ジョギングや散歩に来ているおばさんと知り合いになるんですね。それで



どんぐりのアクセサリーとかあげると喜ばれる。
そうすると「公園に行けばその人にまた会える」ってんで会いたくて行くようになる。あちこちの公園にそういう「彼女」がいるそうです。
もちろん、おばさんだけじゃなくお年寄りと子どもも大好きなんです。すぐ仲良くなっちゃう。
植物にすごく詳しいから「〇〇園で梅が一輪咲いた」「どここの桜が今日で終わりだからすぐいなくなっちゃ」とか「新宿御苑の桜に珍しいのがある」とかみんなに教えてくれる。

人のいるところが大好きでイベントが大好き。だから植物がらみのイベントを渡り歩いています。

豊島区の障がい者美術展にもどんぐりの作品を出して賞を何度か取りましたね。

彼の作品にはお年寄りから子どもまで癒す力があります。私に言わせれば彼は「癒し系どんぐり芸術家」でしょうね。

それにね、植物に関する感性には天性のものがあります。うちのプランターでゴーヤ作りをしたんですが、すごく丁寧に指導してくれた。プランター1つに2株で、肥料はアルカリ性のこれをこのくらいとか。そうしたらゴーヤがものすごく実って、近所で「ゴーヤの館」と評判になった。翌年は教わったとおりに自分たちでやってみただけ、ぜんぜんダメ。

植物だけじゃなくて猫ともまるでお話してできるみたいです。うちに来ると約束しても時間を守ったことがない。どうしたの、と聞いたら「猫を追いかけてよそのうちに入ったからそこに花が咲いてて・・・」。

蝶がいると指さしながら追っかけてどっかに行っちゃう。

だから遠足に行っても、彼は好きなものを見ると夢中になっでどこかに行っちゃう。でも、自分で次の集合場所にたどり着くから迷子にはならない。

彼は大きな子どもなんです。私たちが現代人がすっかり失ってしまった子供の頃の初々しい感性が彼の中には今も息づいているのかと思います。自分の好きなことで人を喜ばせて自分も喜びたい。それだけ。純粋なんです。

ADHD系の人に特有の、好きな事への集中力・面白いことに対する爆発的なエネルギーは半端じゃない。

でも、最近はこちらに來ないんですよ。来ると「片付けなさい」って説教されるのがわかっていから。

彼はアパートをゴミ屋敷化させて破滅するリスクを常に抱えています。

彼のアパート生活をどう支援するか私たちがTENOHASIの大きな課題なんです。

彼の人生はきつと苦難に満ちたものであったことは間違いないと思います。障がい故に、ご家族や周りの人たちにも大きな

負担をかけたこともあったでしょうね。

ご自分の生き辛さの中で、路上生活までしながら明るく生きてきたKさんですが、やっと、人生の後半になってアパート生活に辿り着き、今は人間らしい生活をしながら自由を謳歌しているんですよ。

私としては、彼の今の平和な生活が一日でも長く続くことを心底願っています。しかし、実はその平和な生活も片づけが出来ないという唯一致命的な障がいのため、アパートを追い出され、再び「路上のアートイスト」に戻ってしまうのが心配で仕方ないんです。

彼は正に「今を生きる」人なので今が楽しければ明日の事などど吹く風で、私たちの心配をよそに、今日も自然の中を無心に散策していると思いますよ。

ところで、私はKさんのことを考えていて最近ふっと思っていたことがあります。

彼にはマネージャーが付けばいいのかなということ。芸能界でもスポーツ界でもビッグプレイヤーには必ず、マネージャーが付いています。Kさん

もある意味ビッグプレイヤー
と言っているんじゃないですか。
だって、Kさんのような変わ
った人は世の中に滅多にいませ
んからね。

勿論、Kさんがマネージャー
を雇うお金はないのでボランテ
ィアとしてお願いするしかあり
ませんが。

私が描くKさんのボランティ
ア像は、

①彼の自由奔放な生き方をその
まま認めて、彼の野生の閃きを
尊重し、癒し系の作品を心の底
から好きになれる人。

②彼の出来ないこと（片付けな
ど）に対し、これはダメ、こう
しなさいなど一切言わないで、
逆に、出来ないことや嫌なこと
はしなくていいよといってあげ
る人。

③彼のやりたいどんぐりやクロ
ーバー集め、イベント廻り、創
作活動などどんどんやりなさい
と励ます人。アパートの片づけ
は私がすべてやるからKさんは
一日中力いっぱい遊び回ってき
なさい。部屋には何を持ち込ん
でもいいよ。全部、私がかきれ
いに片付けて整理してあげると言
ってあげる人。

④紆余曲折があったにしても、

遂には、Kさんの信頼を100
%勝ち取れることが出来る人。
お互いに信頼し合う良き友にな
れる人。

という感じですね。私がおか
妄想に取りつかれていると思わ
れるでしょうが、これしかない
のですよ。

何と言ってもKさんは規格外
の人ですから、常識的な福祉の
手法で彼を枠にはめようと思っ
たらダメでしょうね。

現に、今までも福祉の世界で
ベテランと言われている人が何
人かKさんに挑戦しましたが、
悉く、失敗しています。

とはいえ、そんな夢のような
マネージャーはどこかにいるか
と言われると困っちゃいますね。

この記事を今、読んでいる「あ
なた」、やって頂けませんか？

(中村雅俊)

密着取材の巻

一月十二日・成人の日。私は
Kさんの密着取材を敢行した。

「その日は明治神宮だよ。何
時に行くかって？そんなの行っ
てみないと分からないよ」とい
うKさんに頼み込んで、明治神
宮の入り口で待ち合わせ。寝坊

して遅刻した私をKさんはニコ
ニコしながら待っていてくれて
いた。
「今日まで氷の彫刻をやってい
るよ」

「この先に栗の木があって、大
きな栗がなるんだよ。朝来ると
みんな拾ってて・・」

明治神宮から代々木公園へ。
すごいスピードで歩きながら口
が止まることはありません。

「これはムクロジの実。昔はこ
れで石鹸を作ったんだよ」

「シイの実を食べるけど、今頃
拾っても堅くてうまくないよ」

立ち入り禁止の札も乗り越え
て、どんぐり・シイの実・ムク
ロジの実・バラの花のような松
ぼっくりなどを夢中になって集
めて回ります。

最後はNHK前の早咲きの梅
を見て、ついでにスタジオパー
クに。植え込みに小さな小さな
花があるのもちゃんと知ってい
ます。

「Kさん、今朝はどこにいたの」
「5時までマックにいて、それ
から地下鉄に乗ってしばらく寝
て、巣鴨でお金下ろしてきた」
「ちゃんと寝てないじゃない。
眠くないの」「いや、全然」

確かに私よりずっと元気。3

時間休みなしで歩き回って疲れ
を知りません。

牛井屋に入ってお昼を待つて
いる間にさっそく拾ったばかり
のどんぐりに絵を描き出しまし
た。

でも、夢中になっているかと
思えば、私に水をつぎ足してく
れたり、さりげなくナプキンを
取ってくれたり。

道に落ちていたゴミをそっと
集積所においたりしたこともあ
りました。さりげない気遣いが
自然にできる人です。

(清野賢司)



しまった！

いつも集合時間2時間前に現れる田屋さんが集合場所に来ていない。家に電話をかけても呼び出し音が鳴ったままだ。

同じアパートに住む鈴木さんが出かける前に呼びに行っ

それを聞いて大笑い。明け方に暴走する気持ちに耐え切れずアパートを抜け出て住み慣れた場所で段ボールを敷いて寝ていたらしい。

・・そっか。

「気持ちよかった？」と聞くと「最高だったよ。」と落ちていた声が返ってきた。やつ

「これで家族に連絡ができるな。」家族の話はめったにしない田屋さんが、突然言い出した。

田屋さんは北海道生まれ。若いころに上京してきてから家族のいる北海道にはもう30年も帰っていないかった。田屋さんがアパートに入ったそ

田屋じい故郷に帰る

てのはしが始まる前から池袋で野宿しながら炊き出しをやっていた田屋博さん(65)。私たちの大先輩にして、長老にして、「アイドル(自称)」。その田屋じいが、30年ぶりに故郷の北海道に帰りました。さて、幸福の黄色いハンカチははためいていたのか？

マネージャー？の中村あずさ(世界の医療団)が報告します

てくださったが、アパートはもぬけの空。

昨日まであんなに楽しみにしてたのにいゝゝ！

お昼頃、新千歳空港に着いたときに田屋さんから電話がかかってきた。

らしくもない、気まずそうな声。今にも消え入りそう。

「サンシャイン(の隣の公園)で寝てただよ・・・」

ぱり田屋さんだ。

——これが4年前の話。

段ボールハウスを作り暮らしていた場所が「立ち入り禁止」とフェンスで封鎖され、60を過ぎてそろそろ身体も

きつくなってきた田屋さんは15年間のホームレス生活に終止符を打ち、その後色々を経ついにアパートに入った。

の夏に北海道で開催された「ベテラン祭り」にみんなで遊びに行こうと決め、そしてまさかのドタキャン騒動が起きたのだ。

その後、生活も落ち着いてきて田屋さんがしだいに「池袋あさやけベーカリー」のパン作りに参加するようになり、パン作りのメンバーとも打ち

解けるようになったころパン屋で集合写真を撮った。数日後、田屋さんが私の事務所のドアにひよっこり顔を出し、そのときの写真をおなかから出して(田屋さんはTシャツの中に大切な書類などをよくしまっている)「これを家族に送りたいんだよ。」と言った。



写真が入った封筒は汗でべたべた、でも写真は見事に無事だった。

田屋さんはふだん字をほとんど書かない。手紙をいっしょに書いてほしい、なんて書けばいいのか？一字一字どう

書けばいいのか尋ねられた。それでもかなりの時間をかけて田屋さんはすべて自分で手紙を書き上げた。

「パンづくりがんばってます。○子さん（妹さんの名前）にあいたい」

しばらくして妹さんから「わたしも会いたいです。」と返事がきた。そこで2回目の企画が立ち上がったのだ。訪問看



護かぞつくのサポートで計画し、日々節約して貯金。6月の気候の良い時が最高だということ炊き出しのない週末を選んでその日を待った。

田屋さんは日にちが迫るにつれて、「やっぱりやめた」「いや今回は大丈夫」と決意とためらいを繰り返して行くのか行かないのか賭けがはじまるくらい周りもドキドキしていた。「これが最後だから」と神妙に繰り返している田屋さん

だっただけ。出発当日。集合時間よりもういぶん早くかぞつくの渡辺さんから私に着信。何かとドキツとしたが、それは田屋さんの到着を知らせる電話だった。

「いけふくろう」に現れた田屋さんは手ぶら。いや、空っぽのカバンだけ持っている。・泊3日の旅行なのにさす

が度胸がある。ポケットには自慢の赤いカメラと財布。カバンはあちこちのみんなにお土産をたっぷり持って帰るためのものだった。

メンバーは田屋さんとわたしとかぞつくの渡辺さんと渡辺さんのパートナー、そして中島さん。空港では家族へのお土産を買った。

緊張の面持ちで搭乗口へ。すでに疲れ切った顔をしている。

「30年ぶりだからな、プレッシャーだよ。」と。

飛行機ではあつという間に北海道へついてしまったことを残念がる田屋さん。

道が広い。天気が良い。さつきまで気づまりの様子。田屋さんもすっかりはしゃいでいる。「まずはラーメンだ！」



掛け声は田屋さん。目にするものみんな写真を撮っている。よく分からない馬の銅像とか、アンモナイトの像の前では集合写真。謎の顔ハメ写真も。

そしていよいよ再会の時が迫ってきた。

・・・そういえば、家族の関係ってどんなだったのだろうか。どんな再会になるのだろうか。気まずい空気が流れるかもしれない。・・・いろいろと思いつめぐらせながら、道を進んだ。

きれいな緑色の家が見えてきた。そして人影。妹さん夫婦は家の前で私たちの到着を待っていてくれた。家の前に回りこみ車を停めながら目が合ったとたんから広がる歓声と高らかな笑い声。妹さん夫婦のこやかな笑顔が、再会と今までの時間のすべてを物語っていた。

開口一番に「あらあ、太ったねえー！」と茶化す妹さん。終始夫妻の全体からやさしい穏やかな笑みがあふれていた。一方で恥ずかしそうに小っちゃくなっているが、全面笑顔

がこぼれてる田屋さん。田屋
さんからまず出た言葉はやっ
ぱり「パン作り頑張ってます
よ」ということだった。

「生きているうちに逢えない
かと思っていたのよ。」

20数年、妹さんはずっと
行方の知れない田屋さんを探
していたそう。お父さんや
兄弟の話、親戚の話。自分の
話。再会をなつかしみながら
止めどもなく話が続くなかで
妹さんが突然わたしに向き直
って言った。

「わたしはこの人に学校を出
させてもらったんだから。」

田屋さんは中学卒業後、家
の中でも優秀だった5歳下の
妹さんが学校を出させてあげ
ようと働きに出てそのお金を
すべて実家に入れていたとい
うことだ。

そんな妹さんは、看護師さ
んで頑張つて今も働いている。
90歳をこえるお父さんは妹
さんの病院にいて元気にして
いるという話だった。

妹さん再び声を弾ませて

「今日は私の誕生日なの！」

約30年ぶりの再会の日は、

偶然なのに妹さんの還暦の誕
生日びったりその日だったの
だ！

「これが最後だから」とこ
ころに決めた田屋さん。

こうして逢えたけれどもう
生きているうちに逢えないか
もしれない、逢えないとわか
っているような兄と妹は、お
互いに元気でね、と何度も言
って別れた。

車で〇川を離れる。ときど
き歩いているキタキツネや広い
広い畑を見ながら田屋さんは
なんども「帰りたくないな、
帰りたくないな。」とつぶや
いていた。

そしてあの人にも、この人
にも、あそこにも買わなくち
やな、あそこもだ、とカバン
には入りきらないお土産を抱
えて田屋さんは池袋へ戻って
きた。田屋さんはずっとずつ
と笑顔だった。



てのはしのひと

その1

《シナガワさん》

その人に最初に出会ったのは、息苦しいように蒸す7月の深夜のことだった。S駅の地下通路へ続く階段の最下段、ついさっき閉まったばかりのシャッターのほうに顔を向け、段ボール箱に身を包むように体を丸めて、その人は寝ていた。白のワイシヤツにグレーのストラックス。さほど汚れてるようには見えない。おにぎりや麦茶の入ったレジ袋を、革靴を履いたままの足元にそつと置き、コンクリートの階段を上る。とそのとき、

「せんせい」

背後からそう呼び止められた。振り返ると、眠っているとばかり思ったその人が段ボール箱の上に正座している。七三に分けられた白髪混じりの長めの髪。白髪混じりの長い眉。人懐っこいような笑顔。

「すいませんね、せんせい」

私は再び階段を下り、彼の傍に

しゃがみこむ。要領を得ない問答がしばらく続く。

「こつちが聞こえねえ」

そう言つて、左耳を指さした。造作の大きな顔。半月ほど前まで、A区で生活保護を受けて、区内の施設で暮らしていたが、同室の若い入所者に二度も所持金を盗られて、たまらず逃げ出した。どうにかそれだけを聞き出す。

「『せんせい』は止しにしてくださいよ」

名刺を差し出して、池袋で野宿者支援をしているNPOであると伝えると、区役所のCさんには世話になったと言う。それだつたらもう一度相談しに行つてみないか。風呂に入つて、エアコンの効いた部屋で眠れる場所もあるからと誘つてみる。

「ここはSだけど、おれはシナガワ」

お決まりのセリフなのだろう。得意げに笑っている。こちらも思わず口元が緩む。充血したどろろり眼と目が合う。

「いやあよかつたあ」

幾度も繰り返す。と、私の腕に両手ですがみついてシナガワさんは言った。

「せんせい、おれを見捨てない

でね」

東北の出身。兵隊に行つた父は戦死した。三人の幼子を連れて母は実家に身を寄せ、飢えをしのいだ。勉強は出来たが、中学卒業後すぐ印刷工となり、二十歳の時、集団就職で上京。身を粉にして働いたら、小金持ちのお得意に見込まれて、二十代で独立した。だが、商売が軌道に乗ることはなく、三年で廃業。その後は鉄筋工、プレス工、土工、できることは何でもやつて生きてきた。

「結婚ね。したよ。子どもも二人」

見合いで連れ添ふこととなつた妻は二度目の結婚だった。二人目の子どもが生まれた頃、別れたはずのヤクザの元夫が、よりを戻そうと姿を見せるようになった。面倒に巻き込まれるのは

御免とばかり、何もかもを残して家を出てきたと言う。掌の上でとんとんとやつてから煙草に火を点けるのがシナガワさんの作法。香りのない「わかば」の煙りが立ち上る。夕涼みに出た、公園のベンチでの会話。シェルターに移つて一週間が過ぎ、T区での生活保護開始を待っている。

た。

「人間にもどつたなあ」

駅前の千円散髪ですつきりしてもらつた頭を撫でながら、シナガワさんが呟いた。

「だから、店長を呼べて言つてんだよ。バカにすんなよ」

通勤途中のスーパーマーケットの店先。大声を上げるシナガワさんに出くわす。目は座り、ズボンの前を濡らし、震える手には缶ビールが握られている。

「おれはビールなんか買つてないだろ」

私に気づき、とつさに姿勢を正して、店員にビールを突き返そうとするが、「返品ですか」と惚ける店員と、「買ってないだろ」と言い張るシナガワさんとの押し問答が始まる。慌てて間に割つて入り、店員に事情を尋ねる。

店に入つてくるなり、シナガワさんは若い女性店員に何か話しかけたらしい。そして、店員が野菜売り場からネギを一束持つてきて、彼に差し出したところ、ネギなど頼んでいないと激昂。店の奥へ消えたかと思うと、缶ビールを握りしめてレジの前に立つた。支払いを済ませ、いったん店を出かけたが、気持ち

が収まらなかつたのだろう。今度は男性店員をつかまえ、難癖をつけ始めたようだ。私は、シエルターへのアルコール類の持ち込みが許されないことを言い、ビールをどうするか尋ねた。その言葉に、シナガワさんは一瞬気色ばみ、私を睨みつける。だがすぐに足元の地面に目を落とし、忌々しそうにポケットの小銭を弄んでいた。と、思い切つたようにプルタブを引き、ぐつと一口飲み込んだ後、黙って缶を差し出した。私は領いてそれを受け取り、路肩に膝まづいて、残りの液体を排水口に流した。

「おれは刺身定食」

シナガワさんの注文には迷がない。注文を終わらせるためだけの注文。そんなかんじかもしれない。私が何にするか決めあげねている間に、「わかば」を燻らせている。退院後の落ち着き先を見つめるため、サービスキ高年齢者向け住宅を訪問した帰り道、お祝いと称して、久しぶりに昼食を共にした。精神科

病院への入院から3か月が過ぎ、「模範生」のシナガワさんが病院に居続ける理由はもはや誰にも見当たらなかつた。最初の施設見学のこの日、玄関を上がつてもものの10分と経たないうちに、シナガワさんは「ここがい」と即断した。そして、二度とその決断を振り返ろうとはしなかつた。

「よほど気に入ったんですね」いつになく楽しげに料理に箸を運ぶシナガワさんの姿に、私は知らず知らず胸に引っかかる何かを呑み込んでしまう方途を選択していた。上機嫌のシナガワさんと古書店に寄り、お気に入りの作家の推理小説を二人で探し、百円ショップで度数3の老眼鏡を購入した。郊外の私鉄駅前からバスに揺られ、畑道を並んで歩き、イルカのレリーフのある病院の門をくぐった。施錠された病棟へと、シナガワさんは消えていった。彼の帰りを迎える、看護師たちの喚声がドアの向こうで響いた。

病院関係者に見送られて、シナガワさんが新居へと引越した二日後、仕事帰りの電車内で携帯が鳴った。散歩に出たシナガ

ワさんが夜になっても帰らないと言う。S駅のあの階段をそれから幾度訪ねても、もう彼に会うことはできなかつた。そして、行方不明者届を出して一ヶ月が過ぎようとする頃、用事で立ち寄ったT区福祉事務所で、顔見知りのケースワーカーに呼び止められた。隣のY市でシナガワさんが再び生活保護を申請したとのことだった。

生活応援班 小川芳範

*プライバシー保護のため
一部書き換えています



イラスト ジェフ・リード

不眠や軽度の鬱を抱えたまま、なんとかやり過ごしている人が日本にはとても多いのではないかな？

以上、大変豊かなお話の絞り滓みたいな要約になってしまい申し訳ありません。実際、相当治安が悪いと言われている国から帰国して「日本の方が緊張する」と仰る方は珍しくありません。

最後に加藤さんが用意してくださった資料から。

34万床という世界一の精神科病棟数の多さ、社会的入院（治療の必要なくなっても社会の受け皿がなく長期入院を続ける状態）のことが社会問題となって久しい。みなさんは精神科病院に入院している人々が年に約2万人は亡くなっていることをご存じだろうか。精神障がいがある人々を隔離拘束し、差別的な低い基準で入院させてきたこと。地域社会にあっては数々の欠格条項で縛り付けてきたことは人権侵害であり憲法違反である。

障害者基本法が制定されて20年間、社会的入院の是正が叫ばれながら、精神科病棟の敷地内につくる「こころのケアホーム」、病棟転換の「退院支援施設」という、退院させると見せかけて実は精神科病院を存続させるための計画が何度も提案されてきた。

今回また「病棟転換型居住系施設」という精神科病棟を介護精神型施設、宿泊型の自立訓練施設にしていくものが提案され、検討会も開催されている。200名程度の精神科病院入院中・退院支援施設入所中の方々への意向調査を実施したのだそうだ。体験や人間関係を地域社会で展開することが困難であったろう人々に、どんな立場の方がインタビューしたのだろうか。調査そのものにおこりえる誤り、すなわち「知ること」「考えること」「迷うこと」「変えること」の保障が担保されない意向調査など調査自体が相手にとっていかに無礼つまり人権侵害なのではないか。どこまで精神障がいがある人々を貶めるつもりなのだろうか。深い憤りで胸が痛む。

.....

話は変わりますが、6年間続けたワンルームタイプのシェルターを今年度で休止することにしました。応援してくださった皆様ありがとうございました。

6年間で莫大な家賃と引き換えに数百人のホームレス状態の人(ほとんどが男性ですが)が「間化」されました。介護ベッドを入れて泊まり込みをしたこともあります。喧嘩で血がながれたこともあるし、病気の人を死の一手手前で救急搬送したことも。アパートに入っても再三利用する結果になった人もいました。夢の中で昔の友達に会ったという人の話が忘れられません。

「間化」とは私が勝手に作った言葉です。「生き延びるための努力」に埋没していた人が「何をすればよいのか本当に分からなくなる」状態のことです。それは生きなおすためには必要な通過点なのです。

ボトムと呼ばれたその部屋は生存の保証のみならず「意味の剥奪」を目的としていたと今なら言えます。

あの部屋は無くなりますが宇宙のどこかで、あのドアがこれからも開いたり閉じたりしている気がします。



ボトムからボトムレスへ・・・開く/閉じる/消える

ちょっと時間がたってしまいましたが昨年10月5日に行われたTENOHASI 勉強会再開第一回のレポートです。

TENOHASI がまだ若かった頃(笑)、路上からの生活保護申請を手探りでやっていた頃には毎月のようにゲストを呼んで勉強会をしていました。これからは年、数回のペースで継続できたらよいと思っています。

第一回は NPO 法人精神障害者ピアサポートセンター「こらーるたいとう」の加藤真規子さんをお招きしました。TENOHASI で路上からアパートに移った方には、その後の長い「日常生活」が待っている訳ですが、なかなか、お金をうまく使うのは難しく最悪の場合、失踪→保護廃止ということもよくあります。逆に言えば精神に障がいがあっても信頼できる誰かが金銭管理を引き受けてくれさえすれば生活の不安は減るので過剰な服薬などの医療に頼りすぎる現状は改善できるのです。こらーるさんには、その一番肝心な部分を頼らせていただいています。

加藤真規子さんはかつて池袋にお住まいで中学は雑司ヶ谷だったそうです。ひきこもりや鬱など様々なお苦勞を経て「こらーるたいとう」に出会われました。こらーるは合唱という意味。たいとうは最初、台東区にあったことと「対等な」人間関係をかけています。

1999年のスタート時点では都内唯一の精神障害者自立サポートセンターだったそうです。最初の頃はとにかくいっしょに食べること。週に4回言問い橋を渡って食事作りに通っていたとか。

当日も詳細な資料を用意してくださり日本の精神科医療と障害者支援の歴史と現在に至るまでの貧しさについて、お話をしていただきました。大変、残念ながら内容を抜粋してお届けします。(文責・坂内)

明治時代、精神病者監護法というのがあり座敷牢のようなところで家族が世話していました。東大教授の呉秀三が実態調査をし「精神障がい者は、まず病気になったこと、それから日本にいて、この二重の苦しみを追っている。」と述べました。戦後になって精神衛生法ができましたが看護職員が入院患者を殺した「宇都宮病院事件」が世界的に問題となり精神保健法に変わり「入院が不当であるとする患者には精神医療審査会と連絡がとれるように配慮されねばならない」等、若干改善しました。

2003年医療観察法、2004年障害者自立支援法に変わり、精神障がい者への施策は身体障がい・知的障がいと統合されました。しかし、現在でも生活保護の受給すらままならない現実があります。地域生活においては障害者欠格条項というものもあり、例えば運転免許、ユースホステルの利用、議会の傍聴などが障がい者に対して制限されていました。現在は見直しが進められていますが。

日本は2014年に障害の権利に関する条約を批准しました。しかし、青梅や立川に集中している精神科病棟には30~40年以上暮らしている人々がまだいます。イタリアでは40年前から退院支援が進み精神病院はすべて解体されました。この貧しさは結局、予算配分の問題であり決めているのは国会です。ただ、そこまで精神科病院を追いやったのは誰かといえば私であり、あなたであり我々でありました。日本は国連の勧告も無視しているし、例えば知的障がい者の性教育に当事者を飛越えて行政が干渉します。知的障がい者の女性の性的被害は1995年頃に多発しました。

日刊スポーツ
2015年 1月 18日

第3種郵便物認可

ホームレスが路上から抜け出せない 格差社会ニッポン

ホームレスを見捨てない。格差社会の色合いが強まる時代に、NPO法人「TENOHASI(てのはし)」は東京・池袋地域の生活困窮者を支援し続ける。政府の15年度予算案では生活保護の住宅扶助(家賃)と冬季加算(暖房費など)が減額。大企業優遇の政策が目立つ現代、てのはし事務局長の清野賢司さん(53歳|中学校教諭)らの活動から社会的弱者との向き合い方を考える。

徹底リスク排除

寒風が肌を突き刺す。1月10日の東京・東池袋中央公園。ホームレスらが背中を丸めながら炊き出しに列をなした。「ご飯、大盛にしてくれ」。しょうゆとだしで豚肉や野菜を煮込んだスープをご飯にかけた丼。勢いよくかき込み2度、3度とおかわりする。温かいコーヒーも配る。清野さんが手渡そうとすると、路上生活者が「どうせなら若い女の子にもらいてえな」とポランティアの女性から受け取った。「それセクハラだよ」と清野さん。ドツと笑いが起きた。何げない会話にホームレスたちの表情が和らぐ。「自分救わなきゃ」なんて大上段に立つ

てやるどころなくなる。会話を楽しんでます」と、清野さんは話す。都内の中学校で社会科学を教えた4年に総合学習の授業でホームレスの経験がある2人に協力を頼った。以来、路上生活者に笑顔でコーヒーを配る清野賢司さん

アベノミクスに奇妙に見えぬ

全国的话题を 追っ 池袋発



東池袋中央公園の炊き出しに並ぶホームレスたち (撮影・三須一紀)

医療相談 マッサージも NPO法人「てのはし」

「てのはし」には「人と人が手をつないで橋を架ける」との意味が込められている。03年12月、中村あずささん(33歳|現在は世界の医療団所属)、森川すいめい医師(41)が設立した。東池袋中央公園で毎月第2、4土曜日の午後4時30分から衣類配布、同6時から炊き出しを行う。同じ場所で医療相談、生活相談、はり・きゅうマッサージも行。毎週水曜日の午後9時30分からは池袋駅前公園で「夜回り」をし、温かいおにぎりも配っている。「シェルター」と呼ぶ一時宿泊施設も運営し、ホームレスを入居させ、生活保護や自立支援事業などにつなげる。森川医師は「お金を生み出せない人は切り捨てられる一方、お金をつくり出す人にさらにお金を渡す政策では格差が広がる一方だ」と警鐘を鳴らした。



希望する路上生活者にマッサージも行っていた



炊き出しと同時に医療相談も行われている

見過ごされてきた3~4割の精神障害

◆清野賢司(せいのかんじ) 1961年(昭36)9月28日、さいたま市生まれ。明治大学文学部卒業後、25歳時に東京都中学校教員に採用。現在は特別支援学級の担任。家族は妻、長男、長女。06年に「てのはし」の事務局長に就任。

アベノミクスが奇妙に見えるという。「貧困を救おうとはしていないよね」と清野さん。15年度政府予算案では、13年度から段階的に進む生活扶助(生活費)の引き下げと合わせ、前年度分より総額320億円の生活保護費が削減される。初めて炊き出しポランティアに参加した40代の男性トラック運転手は「明日はわが身と思い、来ましたが」と不安そうに言った。清野さんも「自分も教員ができなくなったら...。人ごとじゃない」。格差拡大は身近なところで起きている。 【三須一紀】

生活保護費削減

初めに炊き出しポランティアに参加した40代の男性トラック運転手は「明日はわが身と思い、来ましたが」と不安そうに言った。清野さんも「自分も教員ができなくなったら...。人ごとじゃない」。格差拡大は身近なところで起きている。 【三須一紀】

貧困救おうとしていない

炊き出しを手伝うようになり、「日本社会の実態に触れられる」と熱心に活動に携わった。NPO団体「てのはし」で10年活動してきて分かったことがあるという。「お金がないことが貧困ではない。徹底的なリスク排除社会が、格差を広げる要因のひとつだ」という。昔は家を借りるにも、職を探すにも直接対話が全てだった。しかし、現在は大家さんとの間に仲介業者が入り、携帯電話やパソコンがなければ就職活動もできない。たとえ求人サイトにエントリーしても、路上生活者は排除される。弱者切り捨ての社会が形成される。路上生活から脱するチャンスが消えている。もう一つは障害だ。生活保護、住む場所も確保しても、炊き出しに並ぶ人が少なくなっていく。09年末に池袋周辺のホームレスを調査すると、約3割が知的障害、約4割が精神疾患の疑いがあった。14年、名古屋市の団体が調査した際も、同様の結果が出たという。見過ごされてきた障害。てのはしスタッフで元ホームレスの40代男性Kさんもその典型だった。勉強が苦手な中、卒業後に清掃会社に勤務。仕事もうまくいかずクビを切られる生活を繰り返すと、幻覚が見えてきた。統合失調症だった。

はっぴいめーかー大募集

□ ボランティア

- 炊き出し 毎月第2/第4土曜日
調理班（*文京区のお寺集合） 11:00～17:00
*プライベートスペースですのでメールや電話でお問い合わせ下さい
公園班（東池袋中央公園集合） 16:20～19:30ごろ
*昨年4月から時間が変更になっています。ご注意ください。

○ おにぎり配布と夜回り

- *はじめて参加の方は、1週間前までに、お問い合わせフォームから申込んで下さい。
毎週水曜日（池袋駅前公園集合） 21:20～22:30

□ 活動資金

- 郵便振替 00190-8-259686 特定非営利活動法人TENOHASI
○ 銀行振込 ゆうちょ銀行 019(ゼロイチキュウ)支店 当座 259686 トクヒ) テノハシ

□ 物資カンパ 送り先は下記の「発送元」まで。宅配便は夜間指定をお願いします。

- 衣類（これからは春物を。スーツと女性ものは不要）・靴・毛布・カミソリなど
○ 食材（缶詰・レトルト食品など）

TENOHASI = 東京・池袋での生活困窮者支援活動

炊き出し：配食・医療相談・生活相談・鍼灸マッサージ・衣類等の配布・お茶会
（毎月第2第4土曜日）

夜回り：おにぎり配布・池袋駅と周辺の巡回と医療生活相談
（毎週水曜日）

生活応援活動：相談活動・緊急宿泊・申請同行・住宅支援・医療支援・日中活動
その他、生活再建と地域生活定着支援全般
連携団体 世界の医療団・べてぶくろ（浦河べてるの家）・訪問看護センターkazoc
ホームレス資料センター・東京つくろいファンド ほか

特定非営利活動法人TENOHASI 会報第30号 2015/2/1発行

ホームページ <http://tenohasi.org/>

メール TENOHASIのホームページの「お問い合わせ」から または tenohasi@yahoo.co.jp

電話 090-1611-1970(事務局長 清野賢司 平日は18時以降)

発送元 清野方 TENOHASI 事務局

tenohasi happymaker report 20